

都塚古墳第2・3次発掘調査の実施とその成果概要

米田文孝
西光慎治
藤井陽輔

飛鳥班は、2014(平成26)～2015(平成27)年度に実施した、都塚古墳の範囲確認調査(第2・3次発掘調査)の成果を報告する。今回の発掘調査は、都塚古墳の墳丘形態やその構造、規模、周辺部分の状況を明らかにすることを主目的とした範囲確認調査である。本墳は奈良県高市郡明日香村大字阪田小字ミヤコ938番地ほかに所在し、家形石棺を埋置した横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。発掘調査は明日香村教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が連携・共同して実施した。その結果、都塚古墳は一辺40mを超える大型方墳であり、墳丘部分は石積みによる多段築を呈した外部構造であることが明らかになった。

1. 従前の調査研究

今回の調査成果を述べる準備作業として、都塚古墳に関する過去の調査研究を概観しておきたい。都塚古墳は元旦に金鳥(鶏)が鳴くという金鳥伝説から、別名金鳥塚とも称される。本墳は早く江戸時代には注目されており、明和9(1772)年刊の『菅笠日記』(本居宣長著)に「みやこ塚」として登場する。同書には、

嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。内は畳八ひらばかりしかる。廣さに侍る。又岡より十町ばかり。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。これもそのつかのうへに。大きな岩の角。すこしあらはれて見え侍る也となんかたりける。

とあり、本墳の被葬者を用明天皇とする伝承の存在を記載する。なお、石舞台古墳については岩屋(石室)があるという表記に対して、都塚古墳ではその墳丘に石材の露出することのみが記述されており、石室の状況は明らかではない。

明治時代を迎え、都塚古墳は明治26(1893)年に結了した『大和國古墳墓取調書』(野淵龍潜著)に「所傳考証ナシ依テ考査スルヲ得ス」と略述された。同時に作図された本墳の見取図では、羨道に相当する部分がやや窪んでいるものの石室の開口は確認できない。また、見取図では墳丘裾部に沿うように表記されている道であるが、かつては羨道部分に位置したと伝えられており、羨道部の天井石が失われているのはその結果であるのかもしれない。その後、明治41(1908)年には大西源一氏の「大和國高市郡坂田の古墳」(『考古界』)において、横穴式石室の形態や規模、同じく家形石棺の形態や寸法などの特徴が詳細に報告された。大西報告では、

古墳は坂田の民家より北西二丁許の處にあり、俗に「ミヤコ」塚、又は「キンチョウ」塚とも呼ばれ、口碑に塚の中に金の鶏ありて毎年正月元旦に鳴くと傳へたり、古墳の位置は田圃の間にて其の形状は圓形にして石櫛の口は南に面して開きたり、(中略)石櫛は羨

道を有し其の高さ四尺（但埋没したるによる）巾五尺七寸、長さ八尺あり、又玄室の廣袤は長一丈六尺八寸、巾八尺七寸、高約一丈なり、石質は花崗岩にて不規則の石材を使用せり。而して石槨内に一個の石棺あり。石棺は大石を掘り抜きて作れるものにて、其の蓋は四方葺きなること左右に各二個、前後に各一個の突起を有する従来大和、播磨等より発見せられたる石棺中往々見る處なり、土人の語る處によれば嘗て此の蓋を開きたりしに内部に朱の付着しありたりしを認めたる外何者もなかりしと云ふ。（中略）石棺の大きさは下の如し。身 高三尺、長七尺四寸、幅四尺八寸、厚一尺 蓋 高二尺三寸、石棺の石質は俗に練石と稱し、佛徒が誇張して三國の土を練りて作りたりと稱する彼の大和稻淵の竹野王碑、久米寺の層塔等と同種類のものなり。



図1 明治時代の都塚古墳『大和國古墳墓取調書』

とある。この大西報告には、石室内部の埋没状況や石棺内部に塗布された、朱に関する記述があることにも注目できる。なお、先述した『大和國古墳墓取調書』の記録内容を勘案した場合、都塚古墳の石室は 1893 年から 1908 年の間に開口されたい。

大正時代を迎えた大正 2（1913）年刊の『奈良縣史蹟勝地調査會報告書 第一回』では、西崎辰之助氏により、都塚古墳の現況について詳細な記録が残された。これによると本墳は、「一名金鳥塚ト稱シ、田畑ノ間ニ介在セル小丘ナリ羨道ハ南端ニアリテ甚短カク石槨全部花崗岩石ノ大塊ヲ以テ築造サル、石棺ハ凝灰岩ニシテ蓋ハ極メテ精巧ナル六個ノ繩掛突起ヲ有ス。」と報告されており、羨道が短いという石室や家形石棺の詳細な特徴について言及している。大正 4（1915）年の『奈良縣高市郡志料』では都塚古墳について、

都塚は高市村大字坂田字都塚に在り、坂田の民家北方二丁許の處にありて、俗に都塚又金鳥塚とも稱す。古來口碑に塚内金鶏ありて毎年正月元旦に出て鳴くと傳えたり。田圃間に在る圓形古墳にして石槨の口は南に開きたり。玄室は長一丈六尺八寸高約一丈あり、羨道の高四尺幅五尺七寸長八尺あり、石質花崗岩質片麻岩にして不規則なる石材を使用せり、而して石槨内に一箇の掘抜石棺を藏す。石棺は身高三尺長七尺四寸幅四尺八寸厚一尺あり。蓋の高二尺三寸あり、石質は俗に練石と稱する流紋岩質の凝灰岩なり。

とあるが、これは先行する大西報告の要約であろう。また、大正 13（1923）年刊の『奈良縣高市郡古墳誌』では、

高市小學校の西側を通つて、大字祝戸に至り、左へ道をとつて大字坂田へ行く途中、左側に小高い原野がある。これが即ち都塚である。田圃の間にある孤立してある芝地であつ

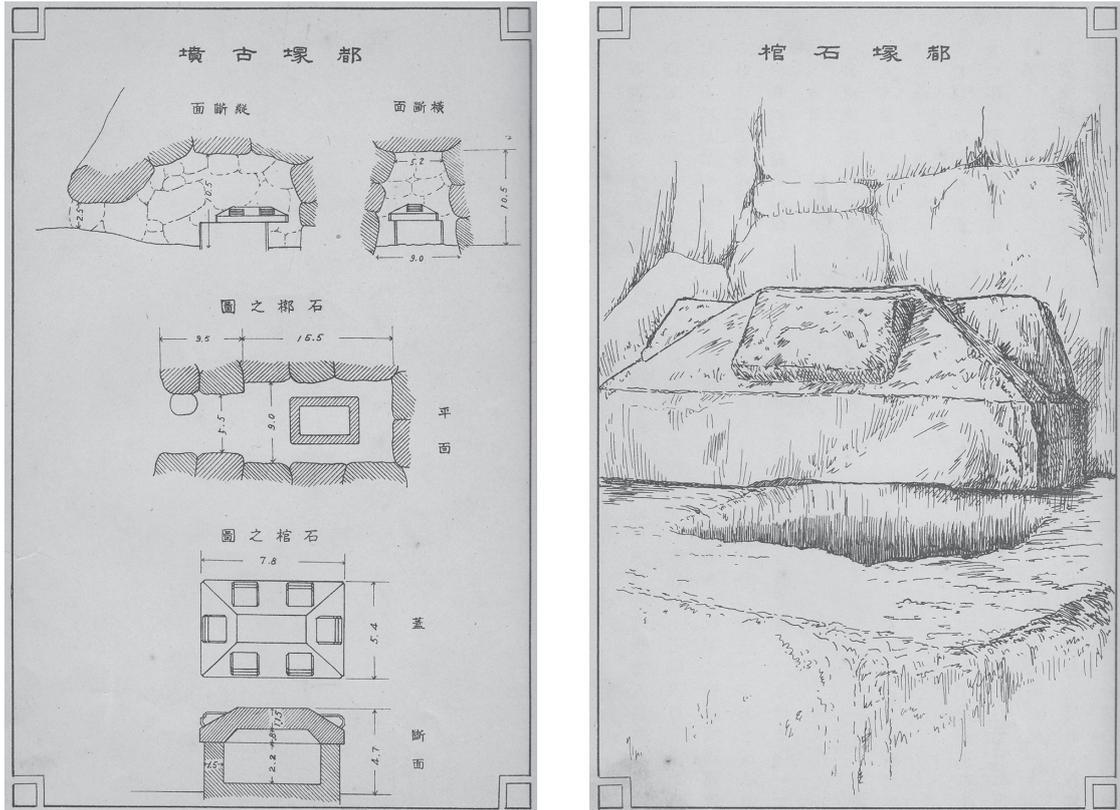


図2 大正時代の都塚古墳石室・石棺『奈良県高市郡志料』(左 都塚古墳石室内部、右 同古墳石棺)

て、その周囲に杉の生垣を繞らして有るから誰でも目に付く。俗に都塚又は金鳥塚とも言ふのである。高さ二間、長徑十五間、短徑四間、面積約一段十二歩ある。圓形古墳で石槨の口は南に開けて居る。羨道の長さ九尺五寸、入口の部分は、幅三尺八寸、高さ二尺五寸、玄室に接する部分で、高さ四尺幅五尺七寸ある。玄室は高さ一丈五尺五寸、幅九尺、高さは天井の中央の最も高い所で、一丈五寸ある。玄室の中では火燈なくとも内部の状態は略知ることが出来る。石質は花崗岩片麻岩で不規則なる石材を使用してある。而して石槨内に一箇の掘抜石棺が臧してある。石棺は高さ三尺、長さ七尺四寸、厚さ一尺ある。蓋の高さ二尺三寸、石質は俗に練石と稱する流紋岩質の凝灰岩である。古來口碑に塚内に金鶏あつて、毎年正月元旦に出て鳴くと傳へて居る。

とあり、本墳の石室や石棺の特徴が詳述されている。なお、本報告に添えられた写真（2点）によると、南側から墳丘全景を撮影した写真では墳丘上には標木が立てられ、生け垣らしきものと、その前面に設置された木柵が看取でき、墳丘周囲に杉の生垣が巡らされていたという記述と符号する。また、玄室内部の写真では、後述する第一次発掘調査時に観察された玄室内部の状況とほぼ一致することが判明する。その後、昭和19(1944)年刊の『飛鳥誌』（佐藤小吉著）においても、『奈良県高市郡古墳誌』の記録を要約する形で、都塚古墳が紹介された。

太平洋戦争後の昭和42(1967)年、関西大学文学部考古学研究室（代表網干善教）により、埋葬施設である横穴式石室を中心とした本格的な発掘調査（第一次調査）が実施された。その結果、埋葬施設は南西方向に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室内には凝灰岩製の家形石棺が安置され、その前方の玄門部には棺台として配置された石材の存在から木棺の追葬が推定さ

れた。石室内からは土師器や須恵器、鉄製品（刀子・鉄鏃・鉄釘・小札）などの断片が出土した。築造年代については横穴式石室や家形石棺の型式、出土遺物などを勘案して、6世紀後半頃の造営と推定された。さらに、第一次発掘調査から40年余を経た平成20（2008）年には、西光慎治氏らにより墳丘を中心とした広範囲な測量調査が実施され、周辺の畦畔の状況などから、一辺約28～30mの方墳である可能性が推定された。

以上、概観してきたように都塚古墳は江戸時代、その被葬者として用明天皇が伝承されており、明治時代以降には横穴式石室が開口して、特異な形態を呈する横穴式石室や玄室内部に埋置された家形石棺が絵図として記録されるなど、継続的に関心をもたれた古墳であったことが判明する。

2. 墳丘と外部施設

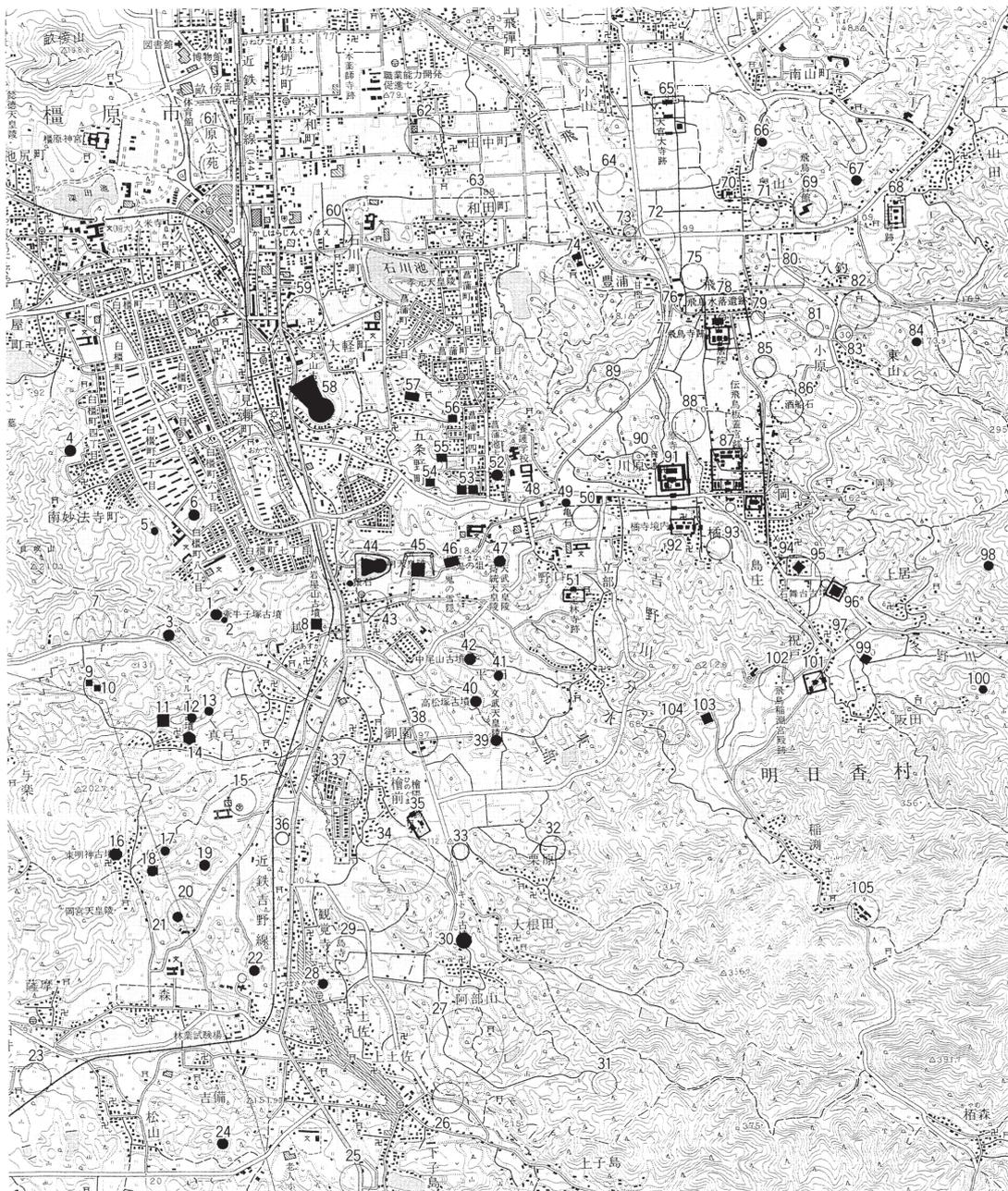
都塚古墳の墳丘は、南から北へ向かって伸びる尾根上に位置している。墳丘は砂礫や粘土が混在した堅固な地山（基盤層）を成形した基底部に、盛土で築造された方墳であり、その墳丘裾部の法面上には川原石で葺石が施されている。墳丘構造は上下に大別することができるが、墳丘下部は地山を成形した基底部で、これより上部は盛土で構成されている。この盛土で成形された部分は段状を呈しており、川原石を用いた石積みが施されている。この段状の石積みは拳大から人頭大の石材を垂直に2～3段積み上げているが、その垂直高は0.3～0.6m、各段の平坦面幅は1m前後である。この平坦面幅は下段ほど幅が広がり、最下段の平坦面幅は約6mである。各平坦面の最上面には黄橙色系の化粧土が敷き詰められているが、その下位には拳大から人頭大の石材を充填しており、石積みを補強する役割を担っていたものと推定できる。墳丘北側の裾部には幅1～1.5m、深さ約0.4mの周濠があり、北側の法面には人頭大の石材で護岸が施されている。周濠の底面は、南東から北西に向かって傾斜している。

墳丘の規模をみると、東西両側と北側の調査区で墳丘裾部を検出しており、これを基準にして復元すると東西約41m、南北約42m、高さ4.5m以上、西側からの見かけ上の高さは7m以上に復元することができる。

3. 埋葬施設

埋葬施設は南西に開口する両袖式の横穴式石室で、飛鳥石と通称される石英閃緑岩で構築される。石室の規模は全長13.8mで、玄室長は5.0～5.3m、幅2.64～2.9m、最大高3.26mである。羨道長は6.8m以上、幅1.9～2.0m、高さは玄門部で1.68mである。玄室の壁面構成は3石積みを基本とするが、4石積みの箇所が部分的にある。石室床面の中央には、幅0.5m、深さ0.2mの暗渠排水溝が設けられている。石室は全体的に強い持ち送りが看取でき、奥壁は床面に対して約25度、同じく左右両側壁も約25度、前壁は32度内傾する。また、天井石は3石が架構されているが、中央の石材が高くなるように前後の石材を傾斜させて組積まれており、天井部が主軸方向に穹窿（疑似アーチ）状を呈するという形態的な特徴がある。

玄室中央には二上山産の凝灰岩を使用した刳拔式家形石棺が置かれている。棺蓋の内面にはわずかに朱の残存が看取できる。石棺の規模をみると、棺身は長さ2.33m、幅1.46m、高さ1.08m、内法は長さ1.74m、幅0.82m、深さ0.65mで、石棺の総高は1.72mである。



1. 牽牛子塚古墳 2. 越塚御門古墳 3. 真弓鎌子塚古墳 4. 小谷古墳 5. 益田岩船 6. 沼山古墳 7. 与楽古墳群 8. 岩屋山古墳 9. スズミ1号墳
10. スズミ2号墳 11. カツヤママ古墳 12. 真弓ミツツ古墳 13. 真弓テラノマエ古墳 14. マルコ山古墳 15. 佐田遺跡群 16. 束明神古墳 17. 佐田2号墳
18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ2塚古墳 22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山呑谷古墳 25. 清水谷古墳
26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 福村山古墳 29. 観覚寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 呉原寺跡 33. 檜隈門田遺跡 34. 檜前大田遺跡
35. 檜隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 松前上山遺跡 38. 御園チシアイ遺跡・御園アリエイ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火振山古墳 42. 中尾山古墳
43. 平田キタガワ古墳 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の俎・雪隠古墳 47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 亀石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡
52. 高蒲池古墳 53. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 54. 五条野向イ古墳 55. 五条野城跡古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 植山古墳 58. 五条野丸山古墳
59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 榎原遺跡 62. 田中廃寺 63. 和田廃寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡
69. 上の井手遺跡 70. 奥山久米寺跡 71. 奥山リウゲ遺跡 72. 雷丘東方遺跡 73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺西方遺跡
78. 飛鳥寺跡 79. 飛鳥東垣内遺跡 80. 竹田遺跡 81. 小原シウ口遺跡 82. 八釣・東山古墳群 83. 東山マキド遺跡 84. 金鳥塚古墳 85. 飛鳥池工房遺跡
86. 酒船石遺跡 87. 飛鳥京跡 88. 飛鳥京跡苑池 89. 甘樫丘東麓遺跡 90. 川原寺裏山遺跡 91. 川原寺跡 92. 橋寺跡 93. 東橋遺跡 94. 島庄遺跡
95. 石舞台1～4号墳 96. 石舞台古墳 97. 馬場頭古墳群 98. 打上古墳 99. 都塚古墳 100. 戒成組田古墳 101. 坂田寺跡 102. 飛鳥稲淵宮殿跡
103. 塚本古墳 104. 朝風廃寺 105. 稲淵ムカンダ遺跡

図3 飛鳥地域周辺遺跡分布図

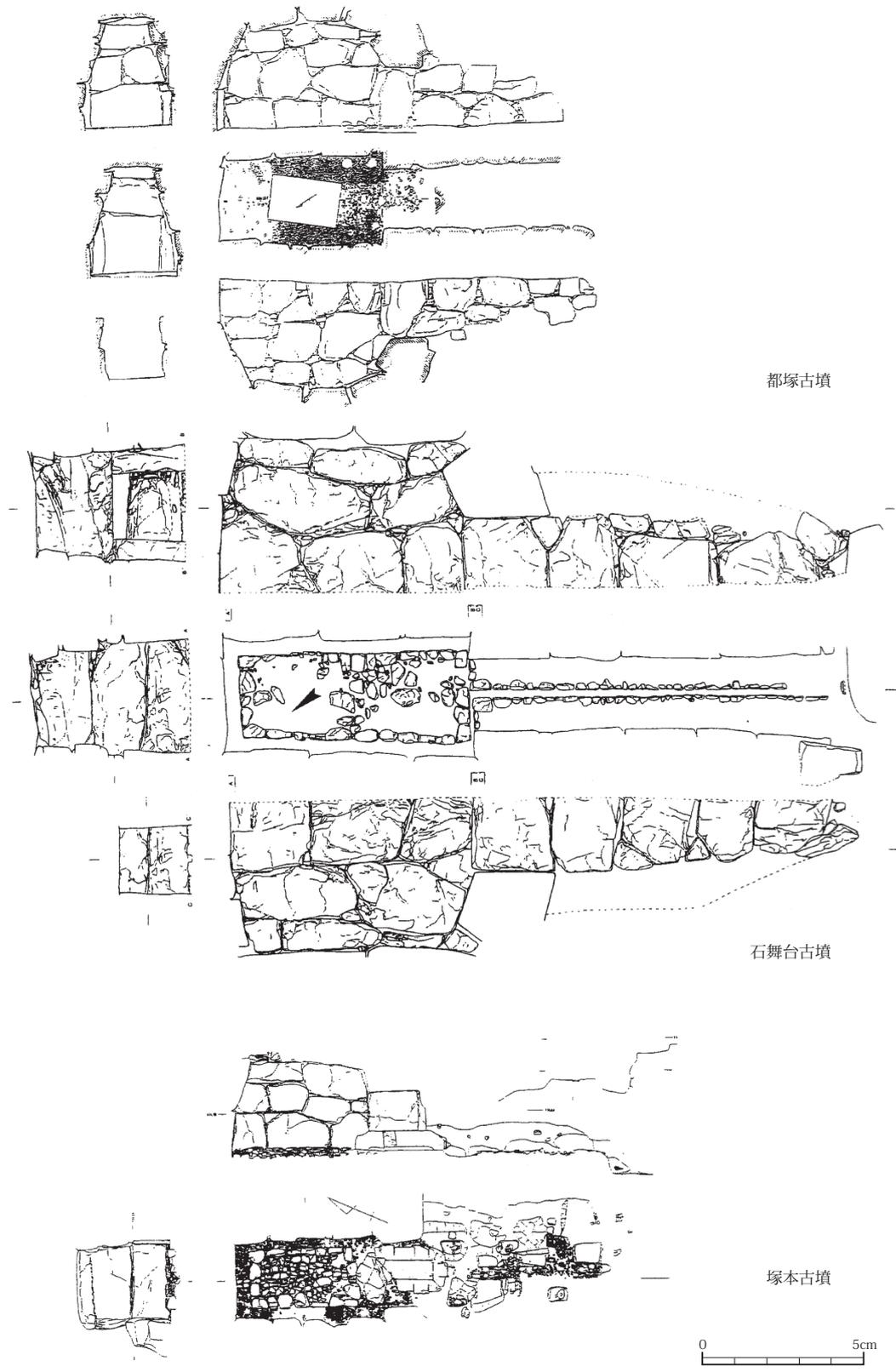


図4 都塚古墳・石舞台古墳・塚本古墳の横穴式石室

また、棺蓋は6個の縄掛突起を備えるが、その規模は長さ約2.4 m、南小口幅約1.4 m、北小口幅約1.58 m、高さ約0.6 mで、石棺の総高は1.72 mである。類例と比較した場合、この石棺は全幅に対して全長が短いという形態的な特徴がある。

4. 地震の被災痕跡

墳丘裾部で、地震に起因すると推定できる地割れ痕跡を確認した。地割れ痕跡は長さ4 m以上、幅0.2～0.6 m、深さ0.6 m以上で、北から北西方向に走行している。また、地割れにより墳丘北側の隅角部付近は、全体的に北東方向へずれを生じている。飛鳥地域で地震に起因する地割れ痕跡は、カヅマヤマ古墳や真弓籬子塚古墳、真弓テラノマエ古墳、牽牛子塚古墳、越塚御門

古墳、高松塚古墳などで確認されており、東南海・南海地震の影響を受けたものと想定されている。特に、カヅマヤマ古墳では出土土器などから、正平17（1362）年に発生した南海地震で被災・崩落したことが明らかとなっている。飛鳥地域では近年の調査成果から、多くの後・終末期古墳や、酒船石遺跡にみるように宮殿付随施設も、東南海・南海地震などの地震をはじめ、自然災害の影響をたびたび受けていることが明らかになりつつある。発掘調査により判明した過去の自然災害の痕跡資料は、今後の地域防災・減災を考える上でも重要な役割を担っている。

5. 出土遺物

今回の調査では、土師器・須恵器・瓦器・石製品などが出土しているが、大半が細片となっている。その結果、古墳の築造時期を明らかにする遺物は含まれていなかった。

6. 築造年代

都塚古墳は墳丘規模が40 mを超える大型方墳であることが確認され、墳丘は残存状態が良好な東側部分を中心に多段築を呈していることが明らかとなった。このような特異な構造を備えた本墳の築造年代を勘案した場合、従来の型式学的にみた横穴式石室と刳抜式家形石棺の年代観に新旧の要素が含まれることから、年代を特定するまでには課題も多い。ここでは石室の構造的な特徴も考慮し、6世紀後半を中心に7世紀初頭までの年代幅を措定しておきたい。

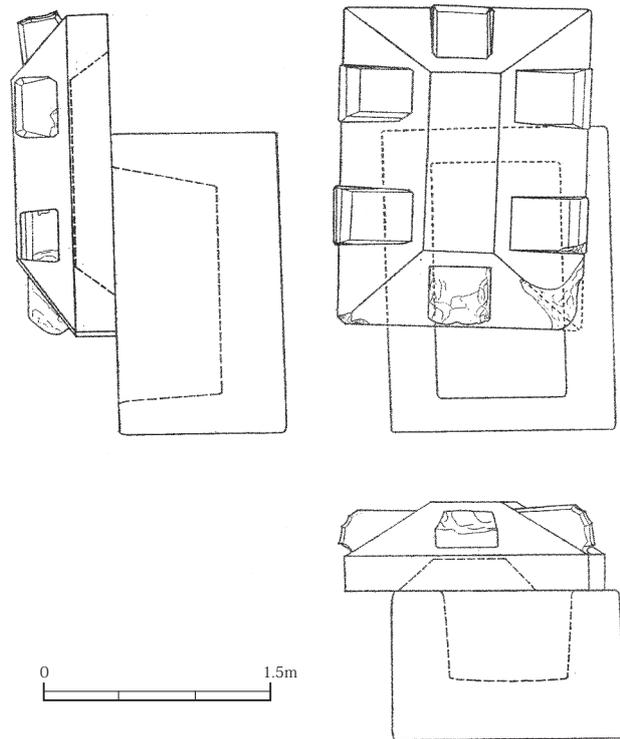


図5 都塚古墳 石棺実測図

7. 都塚古墳の造営意義

今回の都塚古墳の発掘調査の結果、飛鳥地域における後期古墳の様相の一端が明らかになってきた。特に、墳丘構造が多段築を呈することや、埋葬施設では縦軸に穹窿状を呈した天井を架構するなど、特徴的な構造をもっている。さらに、玄室の中央に安置されている凝灰岩製の家形石棺についても6世紀後半の特徴を備えたもので、当村内で唯一完存している石棺でもある。この都塚古墳が造営された頃、中国大陸では隋・唐帝国の成立・統一による東アジア社会の変化に対応して倭国・日本が大陸の制度や技術、文化を積極的に導入し、古墳時代から継続する伝統的なものと融合させながら質的転換を図り、文明化を推し進めていった飛鳥時代が始まる。飛鳥時代は6世紀末から8世紀初頭にかけて東アジアという枠組みの中で、さまざまな変革と中国や朝鮮半島との関わりにおいて、新しい枠組みでの国づくりが進められていった時代でもあった。

このような時代背景のもと、飛鳥地域で都塚古墳が造営される。都塚古墳が立地する飛鳥南東部の谷部には、6世紀後半から7世紀前半にかけて、都塚古墳・石舞台古墳・塚本古墳という近接する3基の大型方墳が順次に造営された。これらの古墳は埋葬施設として両袖式の横穴式石室を構築し、刳抜式家形石棺を埋置することなど共通する特徴がある。その位置関係は、都塚古墳からは石舞台古墳と塚本古墳を望むことができるが、石舞台古墳と塚本古墳とは丘陵に阻まれ、直接的に眺望できない立地である。この3基の古墳は島庄から上居、細川、上、坂田、祝戸、稲淵、栢森に通じる交通の要衝に造営されており、二等辺三角形に3基の古墳が立地していることも、可視領域を想定する上で重要である。この3基の古墳築造後、飛鳥地域の葬地はその東南部から西南部へと場を移していく。飛鳥地域東南部における首長墓系譜は都塚古墳造営後、石舞台古墳、塚本古墳へと続くが、その嚆矢として都塚古墳を位置づけることができる。

また、これら3基の古墳が立地する地域は飛鳥時代に入ると、蘇我氏の邸宅群や草壁皇子の離宮とされる島庄遺跡をはじめ、飛鳥河辺行宮とされる飛鳥稲淵宮殿遺跡など、多くの重要な施設が立ち並ぶ地域となり、吉野へ通じる交通の要衝にあたることから、飛鳥の南東部は当時、飛鳥地域の中でも重要な地域として位置づけられていたことがわかる。また、この地は司馬達等が坂田原に草堂を開いて仏教が伝えられたとされる地でもあり、その後、鞍作多須奈や鞍作鳥（止利仏師）ら、鞍作氏の氏寺となる坂田寺が造営されるなど、新しい文化や思想を摂取できる氏族が蟠踞していた地域であったことも、都塚古墳を考える上で重要である。

倭国では7世紀中頃以降、大王（天皇）を中心とした律令国家体制の確立に向けて大王墓に八角墳が新たに創出される。舒明陵とされる段ノ塚古墳（奈良県桜井市）から、文武陵とされる中尾山古墳（奈良県明日香村）まで、歴代王陵の墳丘が八角形を呈し、多段築化していく。中国大陸や朝鮮半島の王陵においても、にわかに関連性について言及することはできないが、高句麗の巨石積石塚の將軍塚（中国吉林省）や百濟の石村洞古墳群（韓国・ソウル）など、多段築を呈する墳丘が造営されている。また、古墳以外でも舒明天皇が発願した百濟大寺に九重塔の建立が企画されたことをはじめ、東アジアの各国が競って多重・多層の建築物を造営する時代を迎えた。

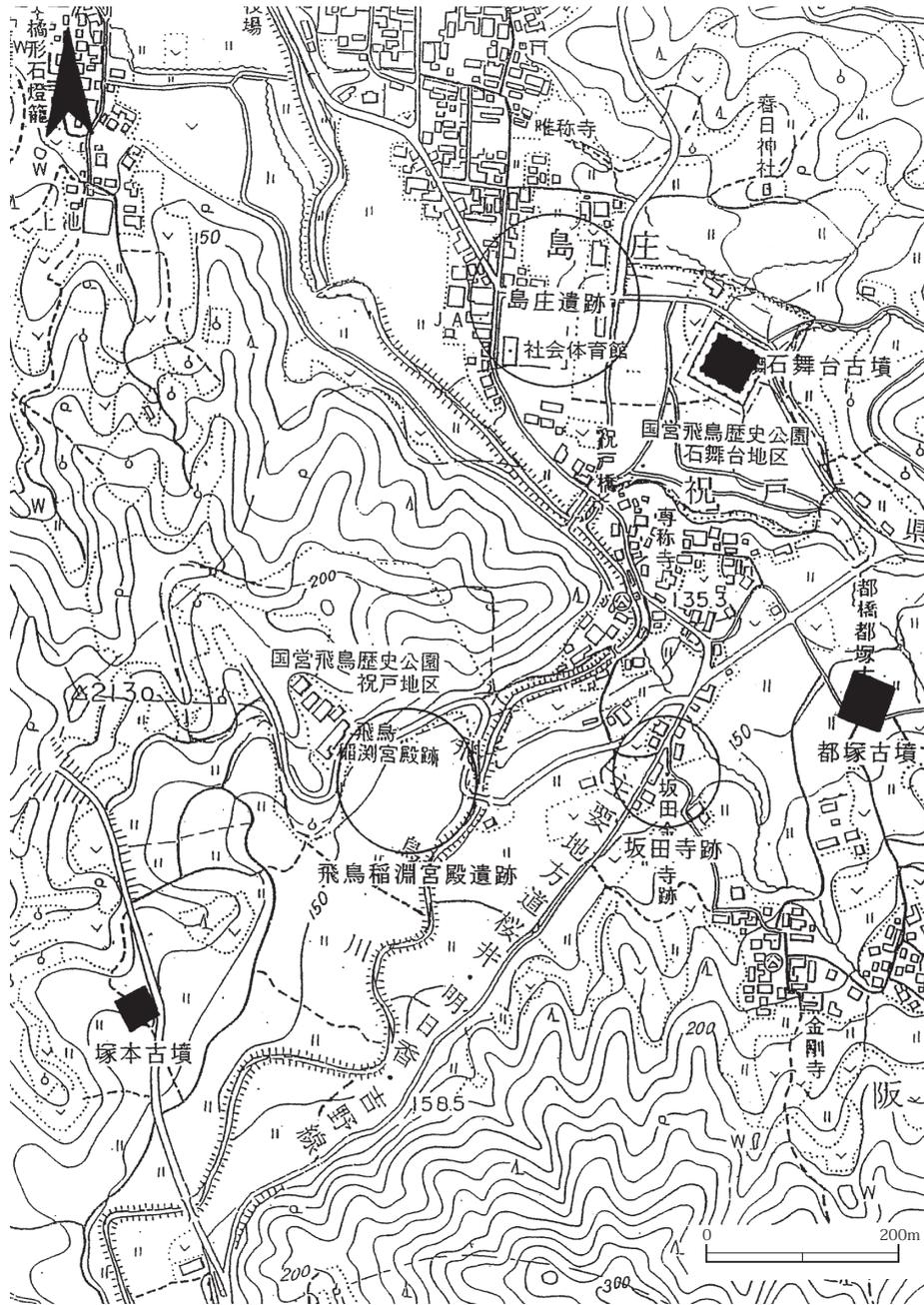


図6 都塚古墳・石舞台古墳・塚本古墳の位置関係図

このようにみると、東アジア諸国の寺院・王陵では当時、多重・重層・多段築の構造物が積極的に造営されていた時代であったとすることができるが、都塚古墳の墳丘形態は倭国においても権力者たちが新しい時代（体制）へ移行する渦中、東アジア社会の枠組みにおいて権威の象徴として造営された多重・多層・多段築の構造物の形態・思想を取り入れた可能性も想定できる。倭国がその後、7世紀後半にかけて日本国へと大きく変貌をとげた背景は、まさに国（政）の中心であり先進文化や思想を積極的に受容できた飛鳥という地域であったからに他ならないのであろう。

以上のように、都塚古墳を特徴づける多段築を有する墳丘構造は、前方後円墳から定型化した大型方墳の出現に至る過渡期の様相を理解する上でも重要であり、飛鳥地域の後・終末期古

墳は東アジア社会の影響のもと、倭国から日本国へと大きく飛躍し、古墳時代から飛鳥時代へと質的転換する時代に造営されたものであり、都塚古墳の多段築構造の墳丘はまさにその時代相を反映したものであり、後続する多段築構造物のプロトタイプであった可能性が想定できる。

なお、本概要報告中に記した数値については、今後刊行される明日香村教育委員会・関西大学文学部考古学研究室による正式報告書中の数値が優先することを付言しておきたい。

【主要引用・参考文献】

- 明日香村教育委員会・関西大学文学部考古学研究室 2014 「都塚古墳」明日香村の文化財⑩ 現地説明会リーフレット
大西源一 1908 「大和國高市郡坂田の古墳」『考古界』第7篇第5号 考古學會
関西大学文学部考古学研究室 1968 「奈良県明日香村坂田都塚古墳発掘調査報告」『関西大学考古学研究年報二』関西大学考古学研究室
西光慎治・辰巳俊輔 2009 「都塚古墳測量調査報告（「王陵の地域史研究～飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ」所収）」『明日香村文化財調査研究紀要』第8号 明日香村教育委員会
佐藤小吉 1925 『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會報告（縣内御陵墓・同傳説地及古墳墓表）』第八回 奈良縣
佐藤小吉 1944 『飛鳥誌』天理時報社
島岡芳雄 1933 『大和高市村誌』
奈良懸高市郡役所 1915 『奈良懸高市郡志料』奈良懸高市郡役所
奈良懸高市郡役所 1923 『奈良縣高市郡古墳誌』奈良懸高市郡役所
西崎辰之助 1913 「都塚古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第一回 奈良縣
野淵龍潜 1893 『大和國古墳墓取調書』（秋山日出雄編 1985 由良大和古代文化研究協会）

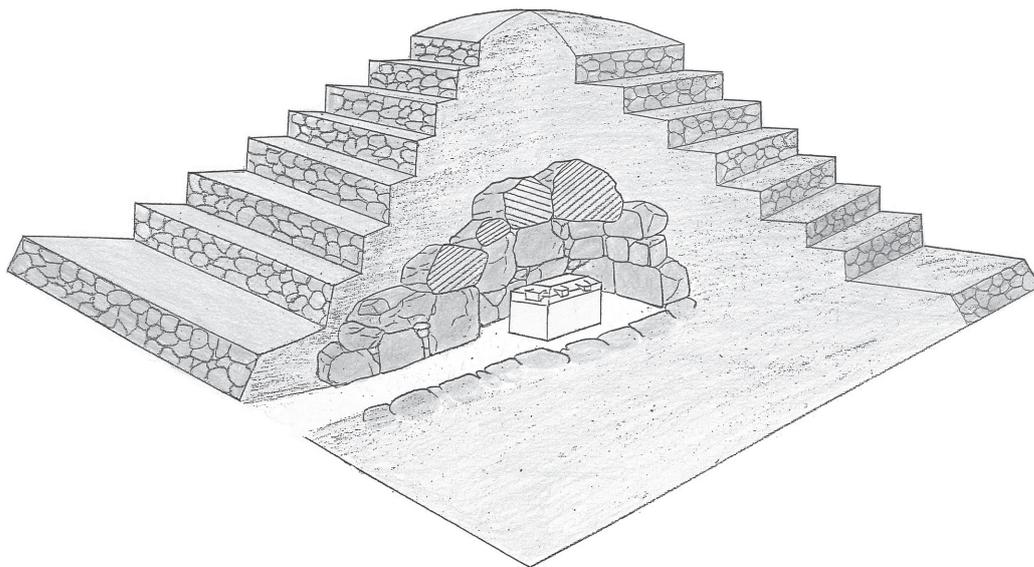
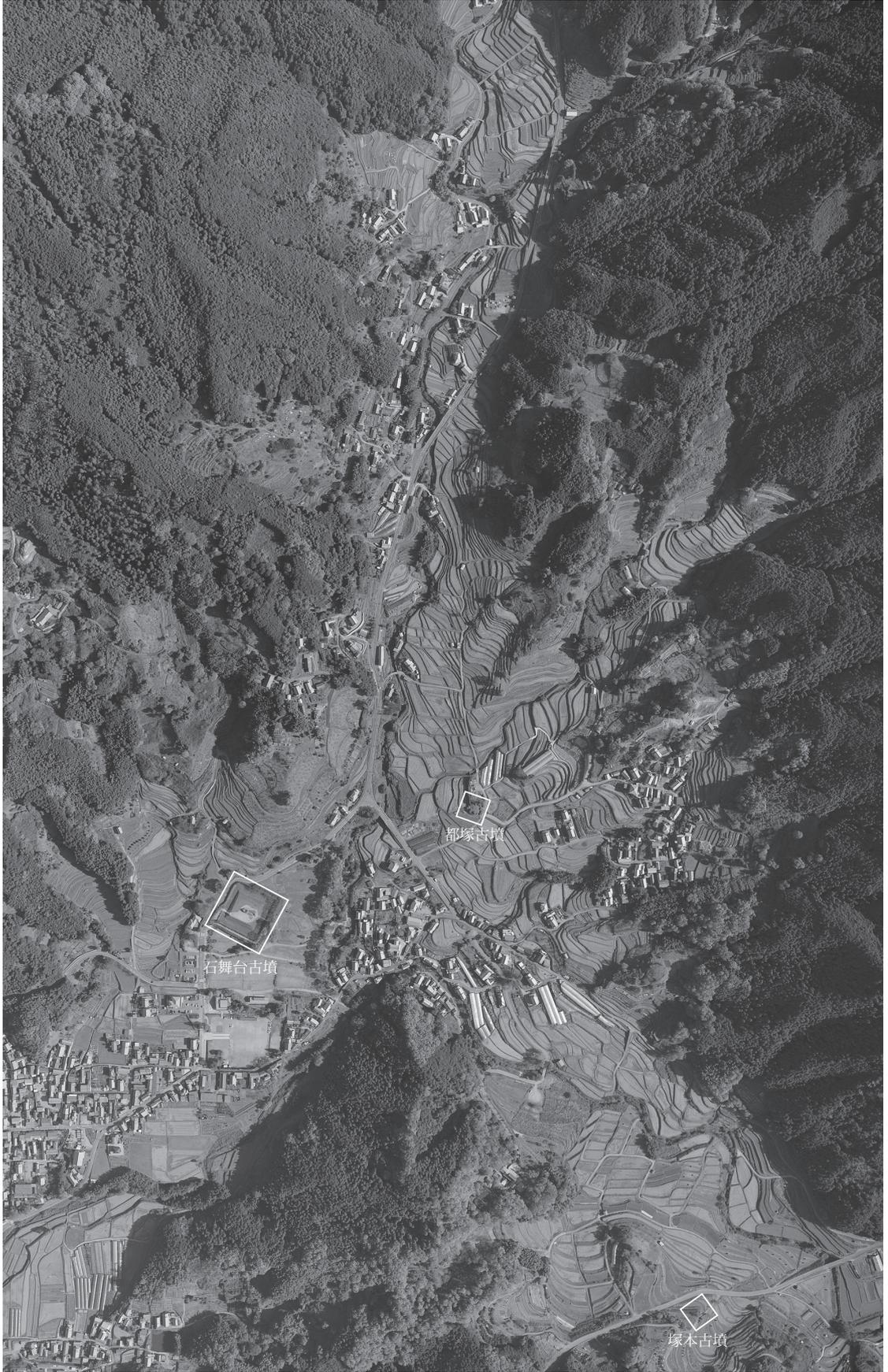


図7 都塚古墳墳丘復元図（明日香村教育委員会作成案）



都塚古墳 周辺航空写真（左が北）



都塚古墳 遠景（東から）



都塚古墳 遠景（西から）



都塚古墳 近景(南から)



都塚古墳 近景(南南西から)



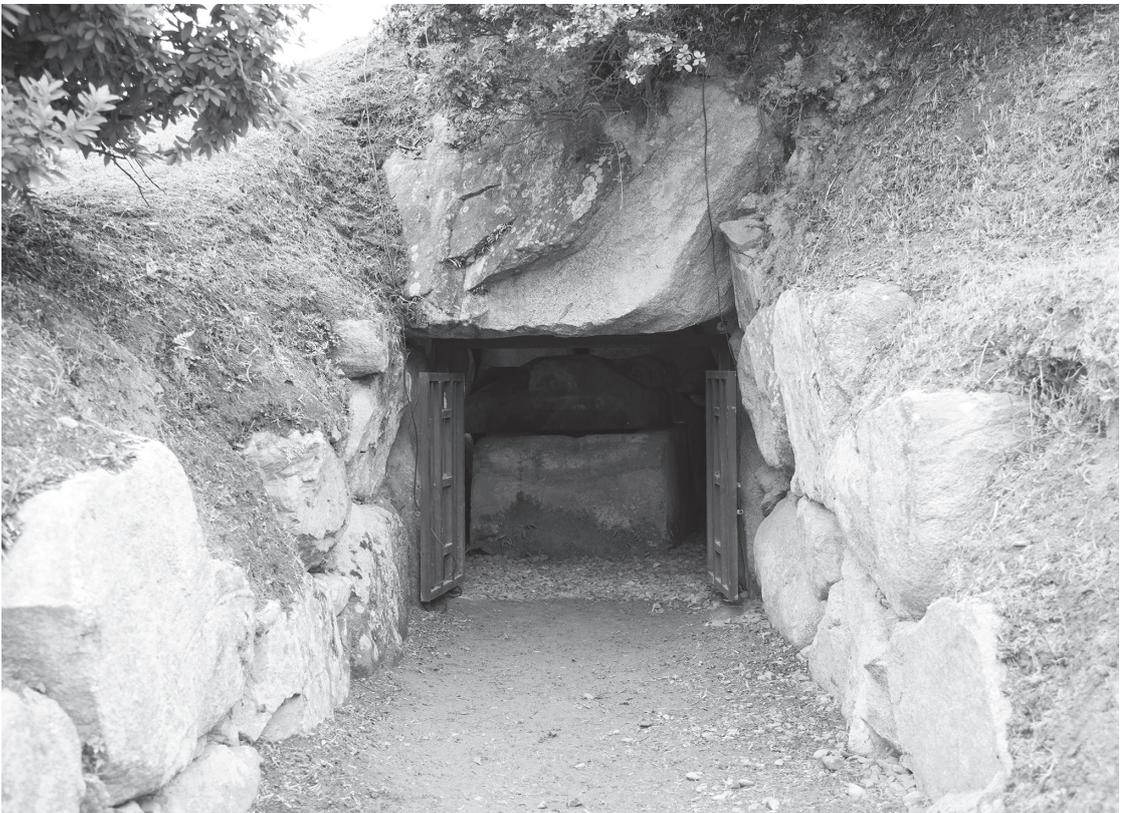
都塚古墳 近景(南南東から)



都塚古墳 近景(西から)



都塚古墳 羨道 全景（南西から）



都塚古墳 羨道 全景（南西から）



都塚古墳 玄室・石棺（玄門から）



都塚古墳 玄室 前壁（奥壁から）



都塚古墳 玄室 左側壁（奥壁から）



都塚古墳 第3・第4トレンチ
(西北西から)



都塚古墳 第4トレンチ(西南西から)



都塚古墳 第3トレンチ (西北西から)



都塚古墳 第3トレンチ (南南西から)



都塚古墳 第5トレンチ(東南東から)



都塚古墳 第5トレンチ
(東北東から)



都塚古墳 第5トレンチ(東北東から)



都塚古墳 第9トレンチ
(東南東から)



都塚古墳 第9トレンチ(北北東から)



都塚古墳 第9トレンチ
(東南東から)



都塚古墳 第9トレンチ (南南西から)



都塚古墳 第10トレンチ (東南東から)



都塚古墳 第10トレンチ (西北西から)



都塚古墳 第10トレンチ (南南西から)



都塚古墳 第10トレンチ (南から)



都塚古墳 第1トレンチ(北から)



都塚古墳 第1トレンチ(南西から)



都塚古墳 調査風景（第3トレンチ）



都塚古墳 近隣住民に向けた現地説明会

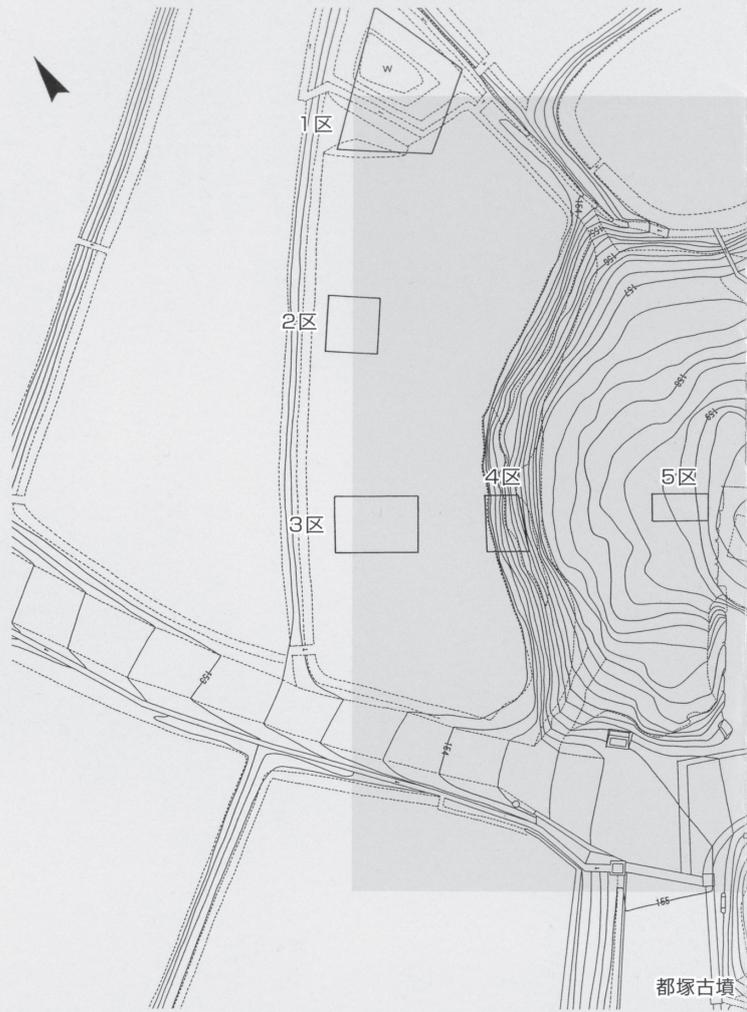
都塚古墳

2014年8月

明日香村教育委員会
関西大学文学部考古学研究室



- ① 都塚古墳 ② 石舞台古墳 ③ 塚本古墳 ④ 島庄遺跡
- ⑤ 坂田寺 ⑥ 打上古墳 ⑦ 伝飛鳥板蓋宮跡 ⑧ 飛鳥寺



墳丘(南西から)



1区全景(東から)





みやこづか

都塚古墳

1.はじめに

都塚古墳は奈良県高市郡明日香村大字阪田小字ミヤコ938番地他に所在する後期古墳です。正月元旦には金鳥が鳴く金鳥伝説があり、別名金鳥塚とも呼ばれています。

古墳の周辺は6世紀から7世紀にかけて、蘇我馬子ら蘇我一族の本拠地でした。また、司馬達等が坂田原に草堂を建て、その子鞍作多須奈が用明天皇の病氣平癒を祈願して建てたとされる坂田寺や蘇我馬子の墓とされる石舞台古墳、さらに蘇我馬子の邸宅とされる島庄遺跡、大海人皇子や持統天皇が吉野へ訪れる際に通った古道など、飛鳥時代の幕開けに重要な役割を担った遺跡が広がる地域でもありました。

都塚古墳は1967(昭和42)年には関西大学文学部考古学研究室(代表網干善教)により発掘調査が行われ、玄室内には凝灰岩製の家形石棺と棺台の存在から木棺が追葬されていたことが明らかとなりました。出土遺物には土師器・須恵器・鉄製品(刀子・鉄鏃・鉄釘・小札)などがあります。昭和42年の調査では墳丘部分の調査は行われていなかったことから、都塚古墳の全貌解明に向けた範囲確認調査を関西大学文学部考古学研究室と協同で平成25年度から2カ年で調査を実施しています。

2.検出遺構と出土遺物

【墳丘と外部施設】

墳丘は南から伸びる尾根上に位置しています。墳丘は礫などで構成された基盤層を整形した方墳で、最下段の法面には川原石を施しています。さらに上部の墳丘部分は段状にした石積みが行われています。この段状の石積みは四段分確認していますが、さらに数段増えるものと推定されます。規模については東西の調査区と北側の調査区で墳丘裾部を検出しており、これをもとに復元すると東西約41m、南北約42m、高さは4.5m以上、西側の見かけの高さは7m以上に復元することができます。墳丘北側の裾部には幅1~1.5m、深さ約0.4mの周濠があり、北側の法面には人頭大の石材で護岸を行っています。

【埋葬施設】

埋葬施設は石英閃緑岩(通称、飛鳥石)を使用した南西に開口する両袖式の横穴式石室です。規模は全長12.2mで、玄室長は5.3m、幅2.8m、高さ3.55mです。羨道長は6.9m、幅1.9~2.0m、高さは約2mを測ります。玄室の中央には二上山の凝灰岩を使用したくりぬき式の家形石棺が安置されています。石棺の規模は棺身の長さ2.23m、幅1.46m、高さ1.08mで、内法は長さ1.74m、幅0.82m、深さ0.65mを測り、石棺の総高は1.72mあります。玄室内には暗渠排水溝が設けられています。

【出土遺物】

土師器・須恵器・瓦器などが出土しています。

3.まとめ

今回の調査では都塚古墳の墳丘の規模や構造を明らかにすることができました。今回の調査成果と昭和42年の成果をまとめると、①墳丘は南から伸びる尾根上に位置しています。②墳丘の規模は東西約41m、南北約42mの方墳です。③墳丘の外観については段状の石積みが施されており、他にあまり例のないものです。④埋葬施設については両袖式の横穴式石室で玄室中央には家形石棺が安置されています。⑤築造時期については6世紀後半頃と考えられます。

このように、今回の成果は都塚古墳を解明する上で貴重なデータを提供しており、飛鳥文化を芽生えさせた飛鳥前史を語るうえで、重要な位置を占めています。